
地下世界-アンダーグラウンド-

さすとなる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地下世界 - アンダーグラウンド -

【Nコード】

N8107L

【作者名】

さすとなる

【あらすじ】

僕が暮らす世界。

それは太陽の無い、月だけの世界。
明るいけれど、荒れている。
それが僕の全て。

ある日の僕ら

僕が暮らしているこの世界は、どうやら普通の世界じゃないらしい。それを知ったのはまだまだ本当に子供だった時だ。

外の、…本当の世界には『タイヨウ（太陽）』というものがあって、それが世界を照らし朝を教えるのだという。

僕は太陽なんてものは見たことない。見たいとも思わない。

見たことない理由っていうのは、ココがその太陽のある世界の下に存在しているから。

見たいとも思わない理由っていうのは、僕は今いる世界で満足してるから。

月しかないけれどそれなりにこの世界は明るい。

この月も作りものだけど、電球だけで出来てるんだって聞いたことがある。

とにかく、僕はこの世界で満足してる。

オーバーワールド アンダーグラウンド
地上世界、 地下世界。

2つの世界はその名前の通り、地上とその下に存在する。

人によつては、太陽世界・月世界なんて呼んでるかな。

どっちが正しいとかそういうのはないけど、若い人はほとんど前者で呼んでるからな……。

ちなみに僕もそつちで呼んでる。だつて呼びやすいじゃん。

「おい！何一人で考え込んでるんだよ、飲み終わったなら帰って」

「……僕にだけ冷たいよね、李音^{りお}って」

「うるさい、いつまでもそこに座っていられると邪魔なの」

「いつまでも居座っちゃおうつと」

今僕の目の前に立って僕を怒鳴りつけてる相手の名前は李音^{りお}。

このギルドの中にあるカフェで働いているギルド加入者で、喧嘩の強い23歳。

どうしてだか、僕にだけはこんな風に冷たいんだ。

まあ、気にしないからいいんだけどね。

「言っておくけどさ、僕はあんたらの情報源でカフェのお客様だから」

ちよつと勝ち誇った感じでいうと容赦なく睨まれました……。

まあ、こういう反応してくれるからいつもからかうんだけどね。

「あ、ところでさ秋澄^{あきすみ}？また何かトラブル起こしたろ。表に10人ぐらい来てるよ」

「うげ、やだなーもう……適当にあしらつといてくれない？お金なら払うからさ」

秋澄^{あきすみ}つてのは僕の名前。

僕が地下世界でやってるのは情報屋で、人の個人情報とかも掴むことがあるからトラブルも多いんだよ。

んで、そういう時は李音^{りお}を雇って、戦ってもらうことが多いんだ。お金出さなきゃ戦ってくれないんだけどさ、ケチだよな…そういうところは。

「……いくら出す？」

「さあ？相手が僕のところに来なければ嬉しいけど」

そうしてしばらく睨み合ってたんだけど、僕がちゃんとお金を払うことを知ってる李音^{りお}は静かに扉に向かった。

扉の方では鍵が掛かっているからか、イラついているからかわからないけど、強くたたく音が聞こえてきてる。

扉の前に立つた李音^{りお}は右足をゆっくりと持ち上げて、蹴りの体制を作る。

それを見たギルドのメンバーははやし立てるように盛り上がってきた。

李音^{りお}の喧嘩は見てて面白いからギルド内でも人気あるみたいだ。

僕がそんなことを考えてたら、李音^{りお}の足が動いて扉が蹴り飛ばされた。

向こう側からの攻撃には堪えていた扉が大きく悲鳴をあげて吹っ飛

ばされる。

あれは……向こう側の人無事なのか少し心配になるかな……。

相手は僕を殺しに来てるだろうから、心配する必要はないんだけど。……っていかもししくなくても、あの扉の修理代って僕持ち？

メンバーの視線が僕に集まってるから僕が払うことになりそうだね、うん。

「すいません、ギルドに何か用でしょうか？あんなに強く扉をたたくなんて、……扉が壊れたらどうするんですか」

「え、いや……その……」

「お、俺たちは……」

自分たちがどんなに強くたたいても壊れなかった扉が、あっさりと蹴り飛ばされただろう状況を見て男たちは口ごもる。

あ、なんで『だろう』なのかっていうと、扉は吹っ飛んできた。

吹っ飛んだ扉の向こう側にいたのは、足が正面に伸びている少年が立っているから。

足が自分たちの方に向いて振りぬかれていたら、誰だっと思うですよ？

「ああ、この少年はこの扉を蹴り飛ばしたんだ」って。

……っていか今自分で扉壊したよね？

なんか言ってることおかしくなっちゃってるよ。

「まあ、君達の用っていうのは情報屋の秋澄あきすみ関係でしょう。それを見越したうえで言いますね。帰ってください、そしてもう二度と秋澄あきすみを追いかけないください」

口を開けてポカンとしている男たちにそれだけ言うと、李音りおは扉を拾うために外へ出る。

外に出る瞬間にこっちをちらっと見たってことは、扉の修理代払えよって意味だと思う。思いたくないけど。

もちろん、覚悟を決めてギルドまで来てるそいつらは、それくらい

のことで諦めるわけにはいかないみたいで。

「ま、待て！俺たちは帰るわけにはいかないんだ。あいつを捕まえ
てボスの前に引きずり出さなきゃならないんだよ！」

「そつ、そつだそつだ！あの情報屋を出せ！」

李音^{りお}はふうつと小さくため息をつく、こちらを見る。

やだなあ、そんな目で見ないでよ……。

僕が雇つてることろバレしてるじゃん。

じーっと僕の方を見てる李音^{りお}に、しょうがないから合図を送る。

そうして男たちはボコボコにされ、うめきながら、一部は泣きなが
ら帰って行ったのだった。

あ、もちろん修理代は僕が払いました。

だって、全員で詰め寄ってくるんだもん。

李音^{りお}が蹴り飛ばしたんであって、僕じゃないっていうのに……。

物語の始まりは突然に

それはいつもの日常のようで、けれど何かが違う気がしていた。そんな不思議な気持ちを感じながら、いつものようにギルドに行くと家を出た。

アンダーグラウンド
あ、地下世界の家って、普通はトタンで出来てるんだけど、僕の家はレンガで出来ている。

オーバーワールド
地上世界の家は鉄で出来てるって昨日初めて聞いたんだけどね。とにかく僕はギルドに向かって大通りを歩いていた。

そうしてみんなに声を掛けられながら大通りを歩いていたんだけど……。

突然後ろから襟を捕まれて引つ張られたんだ。

それをやった人は、この間ギルドの前で李音りおにぼこぼこにされた男の1人……だったと思う。

「ようやく見つけたぞ！情報屋あ！この前はよくもやってくれやがったな」

「それやったの僕じゃないでしょ！？ギルドの人じゃんか」

「お前が雇ったんだろ！調べ上げたぞ。この野郎！」

！マーク多いな、この人。

なんて現実逃避してる場合じゃないって！

僕は喧嘩が死ぬほど弱いんだよ。いや本当に。

さて、と。どうやって逃げよう……諦めるしかないかな……。

いや、でも諦めたらきつと殺されちゃうよお。

まだ死にたくないよ、やり残したことだってたくさんあるのに……。僕がそんなことを考えて現実逃避らしきものをしていた時、僕の襟首を捕まえていた手の力が緩む。

いくら喧嘩が弱くてもその瞬間を僕が無様に逃がすはずもなく、何とか脱出成功。

でも、どうなっただろう？誰かが助けてくれたのかな？

「ごっつ、ごめんなさい！」

「てめえ、ぶつかってんじゃねえよ！おかげで手を離しちまったじやねえか」

そう言いながら僕の襟首をもう一度掴まないといいんだけどな。

襟首を捕まれた状態で後ろをゆっくりと振り返ると、そこには僕と似た顔の少年がいた。

「え……？」

いや、似た顔なんてものじゃない、……全く同じだ。

髪と瞳、そして肌の色以外は。

これらが違うだけで印象つてとても変わるけど、それでも僕には分かる。

髪は僕の方が長い、身長も僕の方が高い。

けれどその髪、瞳の色は、きつと……僕が持つて生まれるはずだったもの……。

「あ、あの……何か……？」

おつと……どうやら考え込んでいる間ずっと彼を見つめていたらしい。彼は怯えた様子で僕を上目遣いで見ていた。

「う、ううんっ。なんでもないよ……ただ、ちょっと……」

彼はやっぱり気付かなかったらしい。

……ん？あれ、そういえばいつの間にか男の手から解放されてるような……。

「こんなところで何やってるの？秋澄^{あきすみ}……そっちの秋澄^{あきすみ}にそっくりな少年は誰？」

と思ったら、どうやら李音^{りお}が来ていたらしい。まあ、派手に騒いだしね。

男は、とそちらを見るとお腹を抱えて地面にうずくまっていた。

少年は突然の乱入者に驚いて固まってる。驚いてばかりだな。

「知らない。そっちでうずくまってる男にぶつかってきたただなか

ら

「……声、思いっきり震えてるけど」
「う」

出来る限り声が震えないように気をつけたつもりだけど、震えてしまったらしい。

え？そりゃ動揺もするよ。僕は自分の生まれはよく知ってるつもりだから。

自分の家族が地上世界オーバーワールドにいるってことや僕自身が捨てられたってことも。

「とりあえず……秋澄あきすみ、ギルドに来るよね？貴方も来てくれますよね」

「えっと、……はい、行きます」

僕の身の上話、聞きたい？

その後、すぐにギルドに行つて、話することにしたんだけど……。
その前に僕の身の上話を聞いて欲しいんだ。

きっとその方がみんなに理解してもらいやすくなると思うから。

とにかく、聞いてくれると嬉しい、かな。僕が調べ上げた、僕自身の生まれを。

僕は地上世界オバーワールドの名家に生まれた。

あの少年……宮みやとは双子で、僕が長男だったんだ。

だけど、僕はアルビノっていう生まれつきの病気で、後継ぎにはなれなかった。

アルビノっていうのは、先天性白皮症せんてんせいはいくひしやう・先天性色素欠乏症せんてんせいしきそけつぼうしやうともいわれる病気。

要は、体中の色素が少なくて、髪の毛とかは白で眼は血管が浮き彫りになって赤く見えるんだ。

僕は白髪に赤眼っていう不思議な容姿をしてるってこと。

それだけなら珍しい容姿だね、で済むんだけどね。

そう、それだけじゃないんだよ、アルビノっていうのは。

太陽から体を守っているのは色素。

んで、その色素が少ない僕は太陽の光にあたると結構大変なことになるっちゃうんだ。

太陽のある地上世界オバーワールドに出ると、僕はまともに世界を見ることが出来なくなる。

その他にもいろいろ困ることがあるんだけどそれはもう、言わなくてもいいかな。

僕の家は裕福で、僕はその後継ぎのはずだった。

でも、その僕はアルビノで、太陽のある世界では生きていけない。家にとつてもそんな僕は必要なかったから。

だから、太陽の無い世界に……アンダーグラウンド地下世界に僕を捨てた。

死んでもおかしくなかったはずだけど、捨て子を拾っては育てていた不思議なおじいさんに助けられてさ。

そのおかげで、今僕は生きてるし、りお李音とも知り合いになれた。

……あんまり、話したくないなあ。こういうのって。

なんて言うのかな、性に合わないっていうか……。

まあ、とにかく！

僕と宮は双子で、僕は地上に戻れないってこと。

……でも、どうして宮は地下世界に来たんだろう？

僕を捨てたような家だから、僕の存在を宮に教えるわけもないし、そもそも僕が生まれたって記録すら消してしまいたいそうなのに。

「じゃあ、君は自分の名前すら覚えてないわけですね？」

「やだなあ……、何でこんな事になってるんだろう……？」

「ごめんなさい……」

上から順にりお李音、あきすみ秋澄、みや宮。

あ、僕の名前覚えてくれてる？僕は秋澄だよ、忘れないでね。

ギルドは初めて来た人が、僕やりお李音と知り合いだってことが珍しいみたい。

さつきからずっと視線を感じてるんだよね。本当ホントにうつとうしいや。

「秋澄、この子の名前知ってるのか？」

りお李音があからさまに周りをにらんで視線を散らすと、僕に聞く。

もちろん知ってるさ、知りたくなかったことまでね。

でもそれは言いたくないことなので言わない。

「……………宮」

「私の名前って宮っていうんですか」

「それじゃあ、宮君^{みや}。君が記憶を失っているっていうことは、君は住むところもないってことですよね」

そう一息に言って僕を見る李音^{りお}の真意は分かる。

だけどそれだけは絶対に嫌だ。何があっても嫌だ。

僕が宮^{みや}を引き取って暮らし始めたなら、僕はきつとこの子に辛く当たってしまう。

……憎^{りお}んでしまう。だから無言で首を振る。

李音は軽く溜息をつくと、

「それなら宮^{みや}には、ギルドで手伝いをしてもらいます。その代わりに、ギルドの所持する住居を貸してあげましょう。見たところ、自分の記憶を失っているだけで、常識まで失っているわけではないですから、日常生活に問題はないでしょう」

かくして、宮^{みや}はギルドの提供した住居に住むことになり、その間、ギルドの手伝いをするようになった。

宮^{みや}の住居が僕の家近くで、僕が李音^{りお}に文句をぶつけたのは当然のことである。

まあ、それは余談だって事で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107/>

地下世界-アンダーグラウンド-

2010年10月10日02時49分発行